

訓点資料訓読文コーパスが開き得る「総合知」

柳原 恵津子（国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員）

概要：西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点は、漢文本文に830年頃の読みを示す符号（「訓点」）が記入された「訓点資料」である。本資料をコーパス化することで、現存する資料に限られる時代の言語データが、「訓点資料」に扱われていない人でも利用しやすくなる。さらに本コーパスは、東アジア文化圏で起きた異言語接触のあり方についての「総合知」を得ることに寄与するだろう。たとえば、9世紀に成立する「記録体」（男性貴族の漢文日記の文体）に、成立当時の漢文の訓法が反映されている様子がわかる。訓点資料での用例採集にはこれまで膨大な時間を要したが、これを簡易化することで、古代漢字文化圏での言語接触の様相という「総合知」を切り開き得るはずである。

キーワード：日本語史、コーパス、訓点資料、和化漢文、漢字文化圏

The comprehensive knowledge that the kunten-material corpus can create

Etsuko Yanagihara (the national institute of Japanese language and linguistics)

Abstract: The Saidaiji version of "Golden Light Sutra" is one of the most famous "kunen material" in which many glosses ("kunen") indicating the translation around 830 are written. This corpus will contribute to gaining "comprehensive knowledge" about the state of interlinguistic contact that has occurred in the Kanji cultural sphere. For example, it can be seen that the "kirokutai" (the style of the Chinese diary written by male aristocrats) which was established in the 9th century reflects the translation style of the kunen-materials. It took an enormous amount of time to collect examples in the kunen materials, but by simplifying this, it should be possible to open up the "comprehensive knowledge" of the aspect of language contact in the ancient Kanji cultural sphere.

Keywords: history of Japanese language, corpus, kunen materials, Japanized Chinese style, the Kanji cultural sphere

1. はじめに

古代の日本文学や日本語史の研究は、とりわけ日本国内の研究の場においては、枝葉末節ではない新しいテーマを見つける余地がなくなってしまうのではないかと――学問分野に蓄積ができるほど増すはずのそのような懸念は、新しい研究の手法やそのためのツールが生まれることで解消され続けてきた。新資料の翻刻や本文索引、影印の刊行などに加え、近年ではインターネット上での画像やコーパスの公開がもはや研究のために欠かせないものとなっているが、これらは研究者自身が作成する側としても積極的に参加しながら関わることが要請されるデジタルヒューマニティの領域として着実にひろがりつつあると言える。

国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」(CHJ)はそのまさにそのような領域を牽引してきた。現在では、上代の『万葉集』や宣命・祝詞、『源氏物語』を中心とした中古和文(散文および韻文)、代表的な和漢混交文の作品である『今昔物語集』や中世の日記・紀行類、室町期の狂言、キリシタン資料、江戸期の洒落本、人情本、浄瑠璃、明治期の諸雑誌や教科書類、各種口語資料や小説類など、従来の日本語研究にとって重要な資料として

常に調査の俎上に上がってきた領域の資料群がすでに公開され、利用可能である。

そのような中、発表者はやはり従来重要な日本語史資料とされてきたにも関わらず、コーパス化の俎上に上がって来なかった、訓点資料のコーパス化に取り組んできた。訓点資料とは、漢文の白文に読み下しのための仮名や符号類を付した資料のことである。話し言葉に近い和文には現れない語彙、語法が確認できる資料群として、また仮名書きの資料の少ない平安時代前半期を含め、あらゆる時代のものが、書かれた年代が確かな形で膨大な点数残されている資料群として重視されてきたが、純漢文に符号で日本語での読みが書かれているという表記形態の複雑さや、四書五経、史書をはじめとした漢籍や仏典というしばしば難解で注釈類・現代語訳がかならずしも充実していないジャンルの文献が対象となるという本文解釈の困難さなどのために、コーパス化が立ち遅れていた。だが、影印、読み下し文、索引などが書籍の形で刊行されてきた代表的な訓点資料は、文法、語彙、文字、漢字音を含めた音韻など、あらゆる日本語史の研究領域にとって確認せざるを得ない資料群として利用されてきた。むしろ難解であればこそ、正確な訳文(読み下し文)を、原本でどのように記されているかといった情報

や解釈を助ける形態論情報などを付与した形で提供し、検索可能とすることが求められているとも言える。

今回取り上げたのは、西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点と呼ばれる、天平宝字 6 (762) 年書写の漢文本文に 830 年頃の訓点 (読み下しのための仮名や符号類) が付された資料である。本資料は、大矢透によって発見・紹介され、その後春日政治 (1942) [1]によって影印および訳文 (読み下し文)、研究、索引が公刊されて以来、資料そのものの価値と、春日による優れた訳文や研究成果によって、頻繁に日本語史研究に用いられてきた。さらに、本資料は近年勉誠出版から影印が刊行され[2]、従来の日本語史研究の用例として利用されてきた春日 (1942) による訳文も、影印を用いての原本確認や、最新の訓点語学の成果を踏まえての再考が期待される状況となっている。

発表者が関わったプロジェクトでは、影印を確認しながら新たに加筆当時の訓読文を再現し直すと同時に、830 年当時の言語資料として正確に利用できる、利便性に優れたコーパスを目指して開発を進め、今回その一部について β 版を公開することが出来た。今回公開するのは全 10 巻のうちの第 1 巻分と規模としてはごく小さいものであるが、訓点資料のコーパス化の一例を提示する意義があると考えられる。

コーパスに限らず、書籍の形の資料としても、和文などの他の資料群に後発する形で開発・公開されてきたという点で、訓点資料が、言語資料として補助的な位置づけになりがちであることは否めない。訓点資料で観察できる言語は、和文と比較すれば話し言葉とはかなり乖離した、漢文を読むためのものである上に、先述のように符号や文字を解読して訳文をつくることも、本文の内容面の意味を解釈することも、原本の複雑な表記形態を反映したデータ化を行うことにも困難さが伴う。第一に話し言葉を対象として行われる言語研究のために。だが、やや異なる角度から見れば、その割り切りは、従来の日本語史研究に視点の偏りを反映したものであるとも言える。だとすれば、優先度がやや後ろに置かれがちな資料群——訓点資料や和化漢文資料、抄物など——を誰でも簡単に精査できる状況が、あたらしい「総合知」を切り開く視点を提供し得るとも言えるだろう。訓点資料検索のためのツールを例にして言えば、漢字文化圏に属する言語としての日本語という側面への視野を提供し、古代中国語と古代日本語という二つの言語の接触によって起こった現象を、すみずみまで丹念に眺め、より適切に記述する道筋を切り開く可能性を秘めていると言える。その可能性は、他の文化圏の歴史を背負った、一見ひ

とくくりとしてしまっても差しさわりないように見える現象をあらわす既成の言葉によらず、古代の東アジア文化圏で起こった異言語接触の過程と影響を新たに定義し、この現象を語るための言語としての「総合知」につながり得るもののはずである。とりわけ、近年では韓国、ベトナムをはじめとした漢字文化圏の他国で同様に行われてきた訓点への関心も高まっており、さらに西欧でのラテン語原典に注釈を施した例も日本国内の学会で紹介されはじめている[3]。特に後者に属する資料のうちには注釈 (訓点資料における訓点にあたる) に特化した検索ができるものもあり[4]、宗教や学問の場でのラテン語・古代漢語の読み書きがどのように読み手の母語と関与したのかを調査できるツールは世界規模で求められているとも言えるのである。

2. 西大寺本『金光明最勝王経』訓読文コーパス (仮称) の概要

2.1 西大寺本『金光明最勝王経』の体裁など

西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点には、次のような表記形態で、原文 (漢文) の文字の周辺に読みに関する文字や符号が記入されている。

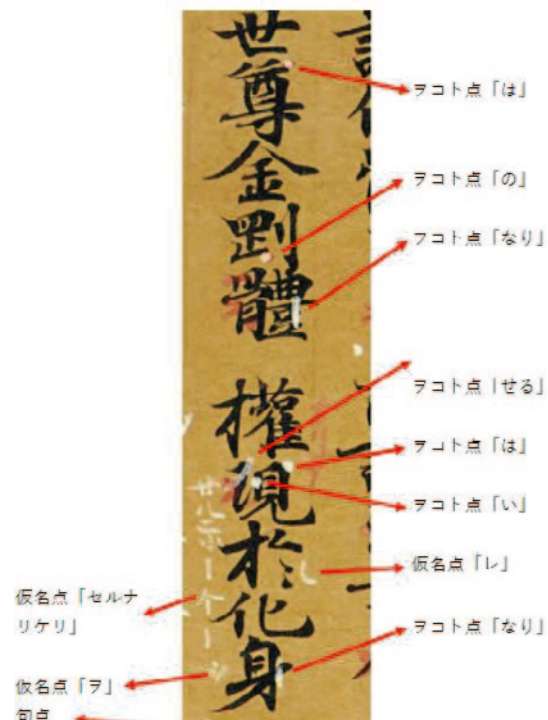


図1 西大寺本『金光明最勝王経』巻1 (総本山西大寺 (2003) 上巻 p.21)

Figure1 "Golden-Light-Sutra"(Saidaiji version) Volume 1 (Saidaiji(2003) Vol.1 p.21)

漢字の周辺の書き込まれた文字・符号類のうち、

白色の筆が830年ごろに記入された平安初期点（白点）、朱色の筆が永長2（1097）年に記入された永長点（朱点）である。本コーパスは、このうち白点のみを参照して作成した訓読文を検索対象の本文とし、全文検索が可能で、符号や文字類の原本での記載状況に関する情報が詳細に得られる仕様をめざした。品詞や活用型などの形態論情報等は現在付与している段階で、出来るだけ早くCHJに収録することを目標として現在も開発を続けている。

図1を見ると白色の書き込みが多くあるが、これらはつぎの二つのタイプに分けられる。

a. 自立語や付属語の語形そのものを表す符号

…ヲコト点、仮名点

b. 句切れなどを示す符号

…句点、合符、分別符、返読符号（一二点）

ヲコト点は、点の形状と漢字のどの位置に記すかによって読みが定められており、少ないスペースに主に助詞・助動詞や語尾などを記す手段として広く用いられた。ヲコト点を含めたa、bすべての符号をまとめて「訓点」と呼ぶ。

なお、白点で記された行間中（漢文、漢字仮名交じり文による本文注記）、巻末の字音注、奥書は本コーパス本文の対象外とした。

今回公開したデータは、以下の三点からなる。

- (1)XM ファイル
- (2)ひまわり版データセット
- (3)訳文テキスト

以下、上記3点のツールそれぞれについて、概略を説明する。

2.2 (1)XML ファイル

原本に記された訓点を参照し、訓点で示されていない付属語などを補読して訓読文(3)を作成し、訓点、補読の情報をすべてタグで記したファイルである。原本から受け取れる情報や読みを助けるための補読の情報をすべて書き記した、本データセットの根幹となるファイルである。

例)

```
<s> 世尊<wokototen>は</wokototen>金剛<wokototen>の</wokototen>體<wokototen>なり</wokototen><hodoku>、</hodoku> <choice><yakubun nb="1">權現<wokototen>せる</wokototen><wokototen>い</wokototen><wokototen>は</wokototen><ruby rubyText="(こ)">於</ruby><kanaten>れ</kanat
```

```
en>化身<wokototen>なり</wokototen><period position="left">。</period></yakubun><yakubun nb="2"><mute text="於"/>化身<kanaten position="left">を</kanaten>權現<kanaten position="left">せ</kanaten><kanaten position="left">る</kanaten><kanaten position="left">な</kanaten><kanaten position="left">り</kanaten><kanaten position="left">け</kanaten><kanaten position="left">り</kanaten></yakubun></choice></s>
```

〈タグ一覧（例文中に見えるもののみ）〉

s 要素 文の単位を表す。

wokototen 要素 その文字列（仮名）がヲコト点で書き込まれていることを示す。ひとつのヲコト点で表す文字列全体を1要素とする。

hodoku 要素 原文のヲコト点、仮名点としては記入されていないが、読みを補助するため、作業により補われた仮名を表す。

kanaten 要素 その文字列に該当する語や語句が仮名点で書き込まれていることを表す。

[属性]

position 仮名点が記されている場所を表す。左傍に記されている時、および右傍に複数の読みが記されている時に用いる。

choice 要素 異訓として複数の訳文が作成できる場合に、それらを括り、並列する訳文であることを示す。

yakubun 要素 choice タグの子要素として用い、並列する複数の訳文のひとつであることを示す。

ruby 要素 当該漢字にヲコト点、仮名点、補読として振られ、漢字の読みを示す部分を表す。

rb 要素 読みが振られた漢字文字列であることを示す。ruby 要素の子要素として rt 要素とセットで持ちこたえる。

rt 要素 rb 要素で示した漢字文字列に、ヲコト点、仮名点、補読で臥された読みであることを示す。ruby 要素の子要素として用いる。

mute 要素 訳文中不読字として読む漢字を表す。空要素。

[属性]

text 原文に記されている不読字を表す。

period 要素 当該箇所句読点が付されていること、および付されている位置を示す。

[属性]

position その句読点が原本で記されている位置を示す。

2.3 (2)ひまわり版データセット

XML ファイルの扱いに慣れていない利用者にもごく簡単な検索が可能となるために、本資料のデータを国立国語研究所が公開する全文検索システム「ひまわり」上で駆動させるためのデータセットである。

本データセットをひまわりにインストールすると、XML ファイルのうちのテキスト部分（つまり訓読文の本文）の全文検索が可能となる。キーとなる文字列の前後の文脈、タイトル、巻・品番号、影印でのページ数などの所在情報に加え、文章種別（会話・韻文）と、当該箇所にも二種類以上の読みが記されている場合に並記した訳文の訳文番号が表示できる。

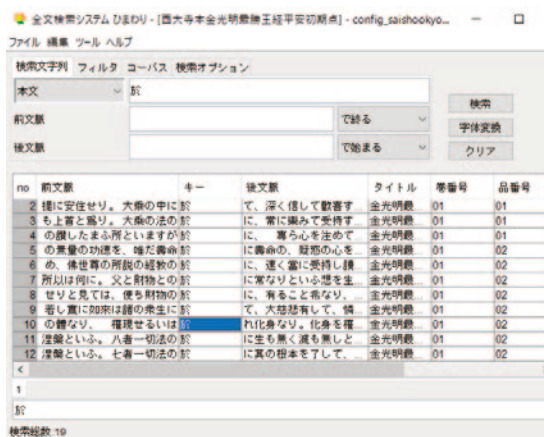


図2 「ひまわり」検索結果画面
(検索文字列が「本文」の場合)
Figure2 Browser display screen
(when the search strings is "body")

検索文字列を選択することで、XML ファイルでは属性値として記されているルビテキストや不読字などを検索することもできる。

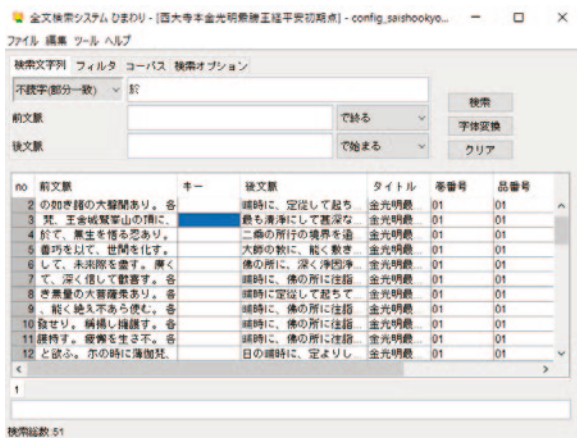


図3 「ひまわり」検索結果画面
(検索文字列が「不読字」の場合)
Figure2 Browser display screen
(when the search strings is "不読字 (mute) ")

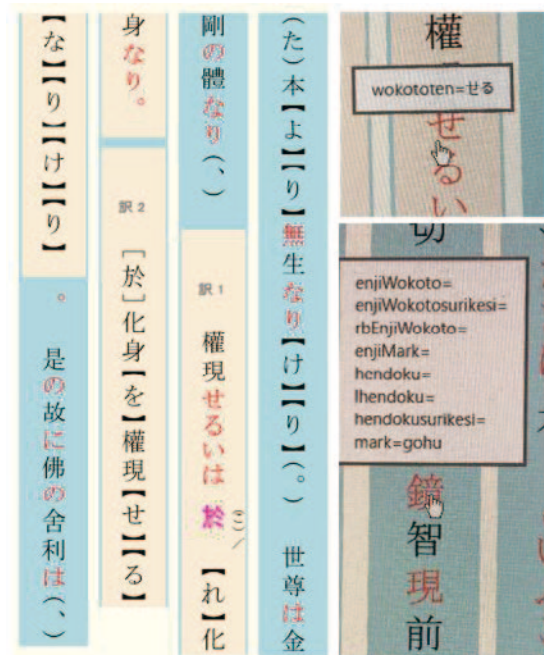


図4 ブラウザ表示画面
左 訳文イメージ (キーが「於」)
右上 フコト点ポップアップ表示例 (「せる」)
右下 符合符ポップアップ表示例 (「鏡—智」)

Figure4 Browser display screen
Left: Display image of translated text
Right: pop-up display

ただ、文 (s 要素) より小さな単位の、フコト点・仮名点の別や補読・別筆に関する情報、符号類などを検索結果として表示させることにはしていない。その点への対処として、検索結果の表をクリックすることでリンクさせたブラウザ上の訳文に、原本での記載状況を詳細に知ることができるよう、括弧類やポップアップウィンドウを用いて符号類等に関する情報を表示した。また、ルビ (検索文字列で「ルビ」を選択して検索できる文字列) は該当する漢字の右傍にルビとして、不読字 (検索文字列で「不読字」を選択して検索できる文字列) は [] で括って (図4左ブラウザ画面の三行目 [於] のような形で) 表示した。

しかし本資料のような多くの情報を持つ資料を想定していない全文検索システムであり、さらに現段階では品詞や活用型、語形などについての情報 (形態論情報) も付与されておらず、重要な原本情報を表示しきれていない面がある¹。

¹ たとえば、1つの漢字文字列に2通り以上の読みが記される「異訓」が、ひまわり版の「前文脈」「後文脈」覧ではひとつのテキストとして連続して現れてしまう。別の本文として異訓を区別することよりも、検索文字列とすることを優先した結果であり、検索結果の「訳

2.4 (3)訳文テキスト

(1)(2)では再現できない、従来の形式(書籍・雑誌等に掲載する際に用いられてきた形式)に沿った表記法で新訳文を記したものである。論文等へ用例を挙げる際に必要な情報を、漏れなく括弧等で記した形式の本文を提供するためのものである。

①世尊 {は} 金剛 {の} 體 {なり} (、) 【權現 {せる・い・は} 於【(こ)】レ化身 {なり}。[[於] 化身 #ヲ #權現 #セ #ル #ナ #リ #ケ #リ #】】。

(括弧・記号一覧)(例文中に見えるもののみ)¹
漢字 漢文本文

平仮名 (丸括弧なし)

ヲコト点で表記された読み。

XMLの wokatoten 要素の内容に対応。

{ } ひとつのヲコト点で示された句切りを表す。複数のヲコト点で記されている際に、{ ・ } のように「・」で区切る。

XMLの wokatoten 要素1要素分の範囲に対応。

平仮名 (丸括弧あり)

作業による補読。

XMLの hodoku 要素の内容に対応。

片仮名 仮名点で表記された読み。

XMLの kanaten 要素の内容に対応。

【 】 並列する複数の訳文を括る。

XMLの choice 要素に対応。

【 】 直前の漢字に記されたルビ。

XMLの rt 要素に対応。

[] 異訓がある際の二つ目以降の訳文。

XMLの yakubun 要素のうち nb 属性値が2以上のものの要素内容に対応。

[] 不読字。

XMLの mute 要素の text 属性値に対応。

左傍などに書かれた仮名点。

XMLの kanaten 要素の position 属性に対応。

3. 標準的な利用例——用例の採集——

本コーパスは、日本語史研究のために特定の語や符号を簡便に検索できることを目指して開発したものである。現段階ではXMLに形態論情報が付与されておらず、品詞や語彙素(辞書の見出

文番号) 覧への記載の有無で判別するしかない。

¹ なお、本稿で以後示す用例は、基本的にこの訳文テキストによる。ただし上記(括弧・記号一覧)にない括弧や記号が用いられている例については、この一覧の範囲の形に一部修正をした。

しに相当する、活用形や表記の異なりに関わりなく検索可能とするための単位)などで検索することができない。現在、形態論情報付きのバージョンを開発中だが、本バージョンでの用例検索の例を挙げる。

3.1 「於」の読まれ方

漢文中非常に多く用いられる助辞のひとつである「於」は、本資料巻1には70例見られる。

「於」の字に何らかの訓点(点)が記されている例が19例、不読字の例が51例であることが、XMLに記されたタグや、ひまわりの検索文字列(本文・不読字)ごとの検索でわかる。

A, 「於」の字に加点のある例(19例)

〈於て〉 (にして・において) 3例

②三世 {の} 法 {に} 於 {て}、無正 {を} 悟ル忍 {あり} (p. 5)

〈於に〉 (のうへに) 14例

③シカレトモ諸 {の} 有情 {の} 於 {に} (、) 厭背 {を} 生シ {たま・は} 不【ぬ】、是レ如来 {の} 行 {なり} (。) (p. 27)

〈於に〉^{のみ} 1例

④唯 (だ) 【壽命於【{のみ}】{に}】 [[於] 壽命 {の}]]、疑惑 {の} 心 {を} 【生 {す} #ス#】】。 (p. 13)

〈於れ〉 1例 → ①

B, 「於」の字に加点のない例(51例)

〈「に」を補読〉 32例

⑤自然 {に} [於] 蓮華 {の} 上 {に} 顯限 {せり} (、) 四 (はし) 【ら】 {の} 如来有【{いま}】 {す}。 (p. 12)

⑥各 [於] 晡時 {に}、佛 {の} 所 {に} 往詣 {し}、 (p. 7)

〈「を」を補読〉 11例 → ①

〈「にして」を補読〉 5例

⑦是 {の} 時 {に} 妙幢菩薩、独り [於] 静 {なる} 處 {にして} (、) 是 (の) 思惟 {を} 作 (さ) {く}、 (p. 11)

〈「には」「とに」「と」を補読〉 各1例

⑧唯 {し} 阿難陀 {のみ} [於] 学地 {に・は} 住 {せり} (。) (p. 4)

Aの例は、XMLでは、本文中の「於」の字自体に記されたヲコト点（「に」、「て」（②）、「の」「に」（③）、「のみ」「に」（④）など）が wokototen 要素として、仮名点（「レ」（①）など）が kanaten 要素として記されており、ひまわり版では「検索文字列」で「本文」を選択して「於」を検索すると、前文脈・後文脈とともに用例一覧を見ることが出来る。また、Bの例は、XMLでは mute 要素（空要素）text 属性の属性値として記された「於」の後ろの名詞句（「蓮華上」（⑤）、「晡時」（⑥）、「思惟」（⑦））の直後に、「に」「を」「にして」が wokototen 要素として記されており、ひまわり版では「検索文字列」として「不読字（部分一致）」を選択し、「於」を検索すると用例の一覧を見ることが出来る。

このように、検索したい漢字の読み方のパターン（「於」には本文として読み下す場合と不読字の場合がある、など）や、想定される加点の種類（ヲコト点、仮名点）などへの知識を持っていないと検索が難しい面があるが、原本での状況はかなり詳細に知ることが出来る仕様である。

柳原（2021）[5]ですでに調査・報告し、また本節に記した用例数からも解るように、「於」自体は不読字として先の文脈に「に」などの助詞類のみを読み添えるケースが大多数を占め、「於」自体に「て」や「に」を加点し、「において」「のために」「のみに」のように自立語（連語化したものを含む）として読む例は少数である。本資料で自立語を含んで読む場合にはAのように漢字そのもの（「於」）に加点して漢字を読み、助詞類相当の意味として解釈する場合にはBのように漢字そのもの（「於」）は読まず、後ろの名詞句に助詞（「に」「を」「にして」など）を読み添えるという傾向が例外なく見られる。このような加点の実態を明らかにすることはきわめて基礎的な作業であるが、例えば図 2・3 のひまわり版の検索結果画面の「前文脈」欄を見比べることで、「於」を不読とするのが自然な文脈では「於」は不読とされ、「於」を自立語的に読まなければ読み下せない文脈（前文脈の末尾が「の」「に」などである、など）では「於」自体に訓点が記されていることがわかる¹。この事実は、平安初期には、格助詞「に」は「於」の定訓として把握されてはいなかったことを意味する。

3.2 「於」の読みを通してみる漢文訓読という場での2言語間の干渉

前節にあげた調査結果から、『最勝王経』平安

¹ 正確には、ブラウザ表示画面で表記形態を確認する必要がある。

初期点巻1に見られる「於」70例のうち、半数近い32例が「於」自体を不読とし、後続する名詞句（節）に助詞「に」を補読していること、ここまで助辞「於」と格助詞「に」に親和性があるにも関わらず、返読させて「於」そのものを「に」と読ませる例がないことが分かった²。「に」の補読例が多い理由は、場所や時間という頻りに記述される事項を、「於」「に」ともに担っていたことによるが、加点という行為を経て、訓点資料の加点者は、漢文の「於」が現れたらしばしば後続する名詞句（節）で格助詞「に」を補読することにも気づくだろう。だとすれば、「於」と「に」の意味の重ならない部分、境界にあたる部分でどのような加点が行われるか。このあたりに、二言語間の干渉やその結果としての日本語の変化が生じることが予測される。

「於」を不読字とし、後続する名詞句（節）に「に」を読み添える例（32例）を、試みに山口・秋本（2001）[6]の「に」の項目（格助詞）に記された8種の意味分類にそって分類すると、「①時を指示する」、「②場所を指示する」、「⑦判断の基準を示す」にあたる例が見られる。

〈①時を指示する〉 → ⑥³

⑨是（の）如キ諸{の}人等{は}（、）當{に} [於]無量{の}劫{に}（、）常{に}諸{の}天人（、）龍神{の}爲{に}恭敬せ所レむ（。）（p. 11）

〈②所を指示する。〉 → ⑤

⑩過去{の}諸仏{も}現{に}身骨有{り}{て}、 [於]世{に}流布{して}、人天{の}供養{するに}（、）福{を}得ル{こと}、無邊{に}アラシメタマヘル（。）（p. 22）

〈⑤変化の対象を示す〉

⑪仮使【(たと)】(ひ)波羅の葉【ハ】{を}モチテ、 [於]傘蓋{に}成{して}、能ク [於]大雨を【遮【サ】フ [遮(さ) #ス#] [遮【サ】(す)]] 可(から) {む・とき}、方(に) 佛(の) 舍利(をは) 求(むへし)（。）（p. 21）

〈⑦判断の基準を示す〉

² 「不」「可」「被」などの助動詞は時代を問わず返読して読まれたことと決定的に異なり、注意される。

³ 〈 〉内の丸数字（例：①時を指示する。）が、山口他（2001）における意味番号、括弧の外に記した丸数字（例：〈…〉 → ⑥）が既出の用例番号を表す。

⑫此 {の} 福聚無量 {に・して} (,) 數【(か)す】 [於] 恒沙 {に} 過 (ぎ) {たる・こと} (,) 是 {の} 經 {を} 讀誦 (せ) {む} 者 {は} (,) 當 {に} 斯 {の} 功德 {を} 獲 {む} (と) {す} (。) (p. 11)

山口他 (2001) の分類項目のうち例が見られなかったのは、「③向きを示す」、「④目標となること・ものを示す」、「⑥事の発生するきっかけを示す」、「⑧前に述べたことにさらに付け加えることを示す」である。

32 例のうち、①時、②所を表す用法がほとんどであるのは、推測しやすい通りである。⑦判断の基準を示す「に」を読み添えた例 (用例⑫) は、「その数は恒河沙を超えること」という文意であるが、これは山口ら (2001) が例として挙げるつぎのような用法の格助詞「に」がこの文脈の「於」の意味と合致したために用いられたものだろう。

⑬昼の明さにも過ぎて、光りたり (『竹取物語』)

ところで、「①時を指示する」に分類できるが、⑨～⑪とは異なる要検討例を挙げる。3 つとも同じ偈頌 (仏法を解く詩) に近接して現れる例である。

⑭若【タト】ヒ蠅 {い} 酒 {を} 飲 {み} 醉ヒ {て} 周【スウ】ク村邑 {の} 中 {に} 行キ (,) 廣ク [於] 舍宅 {に} 造ラ {む・ときに}、方 (に) 佛 (の) 舍利 (をは) 求 (むへし) (。) (p. 21)

⑮若使 {ひ} 驢 {の} 脣 {の} 色 赤 {なる・こと} 頻婆菓 {の} 如 (く) {して}、善ク [於] 『歌 {ひ} 舞フ {こと} [歌【カア】舞【フウ】』 {を} 作 (さ) {む・ときに}、方 (に) 佛 (の) 舍利 (をは) 求 (むへし) (p. 21)

⑯假使【(たと)】 (ひ) 波羅の葉【ハ】 {を} モチテ、[於] 傘蓋 {に} 成 {して}、能ク [於] 大雨を [遮【サ】フ [遮(さ) #ス#] [遮【サ】(す)]] 可 (から) {む・ときに}、方 (に) 佛 (の) 舍利 (をは) 求 (むへし) (。) (p. 21)

これらの例は、原漢文ではこのように記されている。

⑭' 若蠅飲酒醉 周行村邑中 廣造於舍宅 方求佛舍利

⑮' 若使驢脣色 赤如頻婆菓 善作於歌舞 方求佛舍利

⑯' 假使波羅葉 可成於傘蓋 能遮於大雨 方求佛舍利

漢文法に則して解釈すれば⑭⑮⑯の「於」は「舍宅」「歌舞」「大雨」であるが、訓点では「造らむときに」「作さむときに」「遮ふ可からむときに」のように、形式名詞「とき」をヲコト点で補い、時をあらわす名詞節として読んでいる。四句目を「方求佛舍利」で締めくくることが 11 聯繰り返しており、そのすべての聯で「～ときに」と読ませているため、単に韻文を訓読する上での工夫ともとれる。だが、「舍宅」「歌舞」「大雨」いずれも目的語と読むべきで、これらの「於」は「動作が直接及ぶ対象を表す」用法である [7]。

「A、「於」の字に加点のある例」としてあげた「於」に加点をする例のうち、②は「三世の法によって」(原因・理由)、③は「諸々の有情に」(動作や及ぶ対象)、④は「壽命のために」(原因・理由)をあらわす「於」と解釈できる。助辞「於」の幅広い意味のすべてを「に」と読むと、意味の把握に支障が生じる。「於」と格助詞「に」を対応させるのは簡明な時・所を示す場合にとどめ、そのほかの場合は文脈を補うために自立語を補ったり、「ときに」といった形式名詞を加えて「於」のかかる先を時・場所に統合したりしたのではないかと推測が出来る。

詳細に助辞の読みを検討していくことで、当時の加点者が日本語の助詞助動詞をどう対応させたか、その際にどのような文法的な把握がなされ、訓読の場で特有の文法の規則が生まれたか、という興味深いテーマが訓点資料には潜在している。

漢文の中で多用される助辞類について、本資料のような主要な訓点資料でどのように加点され、読まれているかという報告は、個々の報告としてはこれまでも多くの集積がある。また、今回取り上げた助詞「に」のように、通史的な文法・語彙などの研究の対象ともされてきた。それらの研究はむろん手作業で用例が採集・集計されたものであるため、人為的なミスもあり、異なった観点から集計しなおしたり、書き手以外の人の手で再検証したり場合には、一から用例を採集し直す必要があった。本コーパスは、830 年ごろの日本語の実態を伝える、解読のやや困難な訓点資料という特殊な資料について、簡便に用例の一覧を眺めて特定の字の訓法を検証することを可能にする。そして、誰が検索しても同じ用例数が得られる再現性のある方法での検証を可能とする。

4. 応用例——古記録資料との対比から見える、和化漢文語法の形成過程——

ところで、「訓点資料」と隣接する分野の資料群として「和化漢文」がある。日本人が日本語を記すための、語彙や措辞などが日本語化した漢文のことで、このうち10世紀に成立した男性貴族が日記を記すためのものを「古記録」、「古記録」に使用される文体や語を「記録体」「記録語」と呼ぶ。隣接するジャンルの資料群でありながらこれまで訓点語研究と記録語研究は干渉する切り口を積極的には見いだせない形で行われてきた。だが、『最勝王経』平安初期点での訓法と、記録体に定着した漢字の用法とを比較すると、記録語が「日本語を記述するための文」であるという一面のみに着目しては説明できない記録語の語法を説明できる事例が見受けられるのである。

小山(1996)によると、まとまった分量の写本が現存する『貞信公記』¹の「於」のうち和化漢文に多くみられる「於補足語-動詞」という倒置用法(補足語が述語に先行する)の例はすべて場所を表す例で、「動詞-於補足語」という漢文法に沿った語序の場合も、そのほとんどが場所を示す例であるという[8]。

⑩於左近陣東庭拜舞(延喜7(907).1.9)²

⑰戌一剋許法皇崩於仁和寺(承平1(931).7.19)

ここからわかるのは、成立当初の古記録で助辞「於」は場所というごく限られた意味でほとんど用いられていたということである。これより100年さかのぼる『最勝王経』平安初期点の中でもっとも多い「於」の用法を和化漢文でも踏襲しているのである。また、「於」自体に加点をしたかどうかと、和化漢文でその語法が採用されるか否かとは関係ないという事実はさらに重要である。訓点資料で「於」自体に実際に加点するのは、「於」と結びつきの強い和訓であるからでは必ずしもなく、むしろ加点しなければ文意が取りにくい、少数派の例だからと考えるべきことがわかるのである。このような初期記録体の語法の在り方が「之」についても言えることを柳原(2020)[11]で論じたので、参照されたい。

5. さいごに

本発表3節や4節で示したような事例を多く

収集することで、漢文訓読や記録体の執筆という行為が日本語に与えた影響や、和化漢文の運用の場で起こった、漢文の語法や語彙と日本語とのすり合わせの実態を見ることが出来る。異言語接触の具体的なあり方を知り、名づけるためにはこのような断片としての事例の収集が不可避である。解読が困難な資料こそむしろコーパス化を行い、効率的なデータ収集を可能にして、「総合知」を磨き上げることに限られた時間や能力、議論の場を割り当てるところから、魅力的な新しい人文学を切り開き得ると思うのである。

謝辞 本発表は、人間文化研究機構広領域連携基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学」の国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の一部として担当したプロジェクトに基づくものである。賜った助成や機会に厚く感謝申し上げる。

参考文献

- [1]春日政治,西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究,岩波書店,1942(ただし、本プロジェクトでは著作集版(勉誠社,1985)を使用)
- [2]総本山西大寺,国宝 西大寺本金光明最勝王経 天平宝字六年百濟豊虫願経,勉誠出版,2013
- [3]ジョン・ホイットマン,中世欧州における「自言語読みの注釈体系について—日本の訓点と比較して—,第125回訓点語学会研究発表会での講演,2021.10.17)
- [4]"St Gall Priscian Glosses v2.0"<http://www.stgallpriscian.ie/> (サンクトガーレン修道院プリスキアヌス著『文法学教程 (Institutiones grammaticae)』の注釈を検索できる。)
- [5]柳原恵津子,『金光明最勝王経』平安初期点における助辞の訓法の再検討,国立国語研究所論集,2021,20,p.187-193
- [6]山口明穂・秋本守英編,日本語文法大辞典明治書院,2001,pp584-587
- [7]戸川芳郎監修,全訳漢辞海,三省堂,2000,p.659
- [8]小山登久,平安時代公家日記の国語学的研究,おうふう,1996,p.282-283,p.199
- [9]"古記録フルテキストデータベース",東京大学史料編纂所, <https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/s hips/shipscontroller>
- [10]"撰関期古記録データベース",国際日本文化研究センター, <https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/c ategory/heian-diaries.html>
- [11]柳原恵津子,平安初期訓点資料における不読字の再検討——コーパス・電子化テキストを用いた訓点語研究の試みとして——,国立国語研究所論集,2020,19,p.201-206

¹ 藤原忠平(880~949)の日記。記事の現存する期間は延喜7(938)年~天曆2(948)年。

² 古記録の用例採集は[9]に挙げるデータベースを用いた。また[10]も有益なデータベースである。